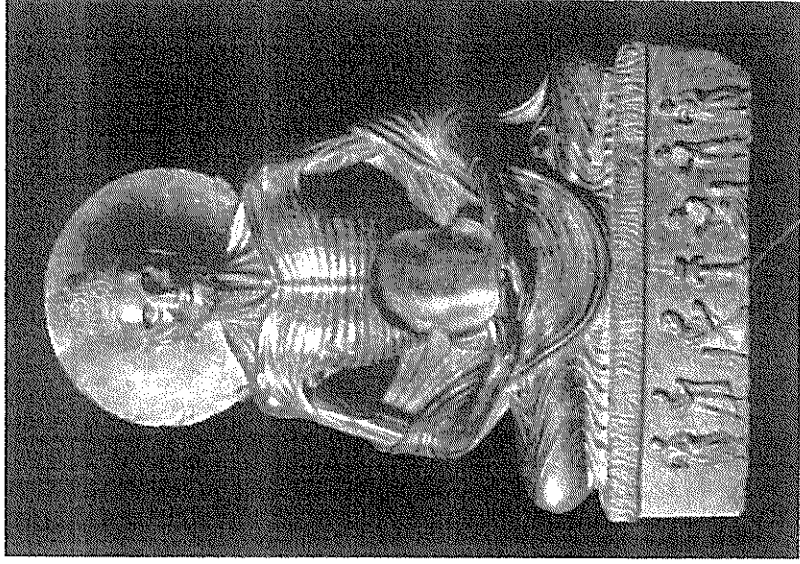


# 「食べない 死なない 争わなない」を読んで！NO2



さる7月、タイ北部の山中洞窟から出られなくなつた13名のサッカーチームの子供達（コーチ1名含）が約2週間ぶりに無事救出された。この出来事に世界中が注目し、無事を喜んだ。この救出劇を成功させた要因は多々あるが、その中で、

なぜ、子供たちが洞窟の真暗闇の中で誰一人、パニックに陥らなかつたのか。

その原因は何であつたのか、メデイヤが色々報じています。特にアメリカメデイヤは「瞑想」だと報じています。（本の内容から少し外れるのですが）

瞑想は、お釈迦さまから始まつたと云つても過言でありませぬ。佛伝によると、今から2500年前、釈迦さま35歳の12月8日の未明、迷妄から覚められて悟りを開かれたと伝えられています。

お釈迦さまは29歳の時出家され6年間の修行の末、修行を棄てられ、修行の疲れを癒しながら菩提樹下で静かに座禅三昧に入られました。そして、正覚（さとりを開く）されたのですが、その後、一週間、覚りの内容を自分自身で味わいをかみしめられたと伝えられています。またその場を立ち上がって、近くの場所に移動し「無花果・いちじく」の木の下の一週間、また場所を変えて座禅三昧、前後7箇に及んだとも伝えられています。

お釈迦さまが、「迷妄・めいもう」迷いを打ち破られて、覺りを開かれたと言つても、迷妄というこの本当の姿がわかりませぬ。お覺りを開かれたとか、正覚と云つても理解できません。

『迷妄・めいもう』と云う言葉自体、日ごろの日常会話では使わない熟語です。熟語を辞書で調べて見ても、迷い・でたらめ。物事の道理に暗く、実体のないものを真実のように思いこむこと、とあります。

お釈迦さまの覺りとは、覺りを開かれて一週間ずつ7回禪定三昧を持たれたことにあります。その三昧の期間中、覺りの内容を説いても理解してもらえらるだらうかとの苦悶期間であつた。その時、人類の代表である梵天の、再三再四にわたる「説法の勸請」にはだされ、説法に踏み切られ、今、經典として私たちの手元にあるのです。

お釈迦さまは亡くなられるとき、いつもそばにいて、お釈迦さまの身のまわりの世話をしながら、いつも説法を聞いていた阿難と云うお弟子が、釈尊亡きあと私たちが何をより所とすべきかと尋ねた。すると、

みずか どうみよう ほう みずか  
自らを燈明とし 法をよりどころとし 自らをよりどころとし

た 他をよりどころとするな。と



境内に咲いたすい蓮